

『法華経』の中心思想

菅野 博史

はじめに

法華経展の開催まことにおめでとうございます。本日は、至善文化会館で講演する機会に恵まれ、たいへん光栄です。私は二〇一一年の六月、至善文化会館を一度訪問しました。そのときは法鼓山で開催された第十六回国際仏教学会に参加するために台湾に来ました。会義終了後に、帰国まで一日の時間的余裕がありましたので、林廷鋒さんにご連絡し、至善文化会館を訪問

したい旨を伝えました。実は、彼が創価大学に留学中、私は彼に一年間中国語を習ったことがありました。皆さんにとって私の中国語は聞きづらいと思いますが、勇気を出して中国語で講演しますので、我慢してください。

法華経展にちなんで、講演のテーマを『法華経』の中心思想」としました。私自身は中国仏教の研究、とくに『法華経』の注釈書の研究をしています。注釈書の研究をするためには、注釈の対象の經典を研究しな



法華経展の会場となった台北市の至善文化会館。世界四大博物館の一つともされる故宫博物院の真向かいに立つ。「法華経展」との懸垂幕は縦17メートルの大きさ

ければなりませんので、『法華経』についてもいくらかの研究をしてきました。本日はそれらの研究をもっとお話します。

『法華経』の中心思想には次の三点があると思います。第一に一仏乗の思想、第二に久遠の釈尊の思想、第三に地涌の菩薩の思想です。第一と第二は、伝統的には方便品第二の開三顯一、如来寿量品第十六の開近顯遠に相当しますが、第一の一仏乗の思想は開三顯一という教判思想として受け取ると、方便品の深い宗教性を見失うという危険性があると思います。むしろ「一大事因縁」、つまり「釈尊は私たちを成仏させるために、この娑婆世界に出現する。これが釈尊の唯一重大な仕事である」という思想として理解すべきであると思います。ここには、第二の久遠の釈尊の思想を生み出す理由を見ることが出来ます。つまり、私たちを成仏させるという唯一の目的のために娑婆世界に出現する釈尊は、いったいかなる存在かという問題への解答として、久遠の釈尊の思想を位置づけることができると考えられます。「一大事因縁」には、私たちがだれもが平

等に成仏できるということばかりでなく、私たちの成仏に不可欠な存在として釈尊が重視されている点が明示されています。

また、『法華経』の中心思想は伝統的には第一と第二の思想として捉えられてきましたが、これらを二つの巨大な建築物にたとえようとすると、それらを支える大地に相当するのが第三の地涌の菩薩の思想です。『法華経』には文殊菩薩、薬王菩薩、観音菩薩、普賢菩薩などの有名な菩薩が登場し活躍しますが、やはり地涌の菩薩が『法華経』の中心思想の一つであると思います。

1 一仏乗の思想

方便品では、無量義処三昧から目覚めた釈尊が舍利弗に仏の智慧の偉大さを説きます。これに疑問を持った舍利弗の要請に応じて、釈尊は「一大事因縁」を説きます。ところが、釈尊が舍利弗の要請に応じて説法を決意したところ、五千人の増上慢の者が退席するという事件が生じます。しかし、釈尊は彼らの退席を制止することなく、彼らの退席の後、釈尊はいよいよ仏

の「一大事因縁」を明らかにするのです。それによれば、仏は唯一の重大な仕事をするためにこの世に出現したと説かれます。では、その唯一の重大な仕事とは何でしょうか。それは衆生に仏知見（仏の智慧）を開き、示し、悟らせ、仏知見の道に入らせることです。つまり、仏は衆生を成仏させるためにこの世に出現したと明かすのです。ここに釈尊と私たちの深い宗教的絆が説かれていると受けとめたいと思います。また、『法華経』はこのことを明らかにしたために、古来「出世の本懐」を説いた経典として重視されてきたのでした。

この「一大事因縁」の箇所は、『法華経』の一仏乗の思想を直接表現したものであり、『法華経』のなかで、最も重要な宗教的メッセージの一つです。このメッセージは、いわゆる常不軽菩薩の礼拝行のなかに最も生き生きとした形で描写されています。常不軽菩薩は、自分の出会うあらゆる比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に向かって、彼らを礼拝し、ほめたたえて「私は深くあなたたちを尊敬する。軽んじあなたなどとうとはしません。なぜならば、あなたたちはみな菩薩の修行を實踐して、

成仏することができるであろうからです」と語りかけます。

経文では、常不輕菩薩の礼拝し語りかける相手は仏教徒に限られています。菩薩道を修行すればだれもが成仏できるとありますので、すべての人間に拡大してよいと思います。簡単にいえば、常不輕菩薩はすべての人間を未来の仏として尊敬したと解釈できます。しかし、何の資格も権限もない常不輕菩薩の授記の行為は周囲の怒りと反感を買います。というのは、それまでの仏教の常識では、授記とは、仏が次の仏になる人に対してなす未来成仏の予言だからです。

迫害に遭いながらも、常不輕菩薩はこの実践を生涯貫きました。自分の成仏を固く信じ、そしてすべての他者の成仏を固く信じて、相手が仏であることを伝えていくこの実践は、現代の我々に対しても啓発的な意義があると思います。それは何か具体的な形ある物を相手に提供することではありませんが、自己の尊厳に目覚めることを教えるものです。当然、物質的な援助が必要なことはいうまでもありませんが、その根底に

人間としての平等意識に裏づけられた、相手に対する尊敬が必要です。いじめや虐待を受けた人は自己評価が低く、自己の人生を悲観的にしか捉えられないということがよく指摘されますが、自己が他人から尊敬されるということが、自己の尊厳に目覚める契機となりうると思います。仏教的には、私が相手を仏として礼拝するときに、まだ顕現していないけれども相手の仏（仏性）が私を礼拝するという関係と、相手を尊敬することがとりもなおさず自己の仏性を顕現することに直結するという関係の二つの関係がそこには成立していると思います。時代は「共生」の思想を求めています。『法華経』の提示する「共生」の思想は、ともに成仏することのできる尊い存在として互いに尊敬する縁起的共生関係を基盤としていと捉えることができるのではないでしょう。

日本天台宗の慶政（一一八九—一二六八）の『閑居友』には、常不輕菩薩の実践の意義について説き、「地獄・餓鬼までもみな仏性のないものは一人もいないので、この道理を知つてしまえば、賤しい鳥や獣までも尊く

ないことはない」と述べています。さらに、中国の傳大士（四九七―五六九。傳翳。善慧と号す）の「夜な夜なは仏を抱きて眠り、朝な朝なは仏と共に起く」と説いた言葉を引用しています。傳大士の言葉は、自己と仏を一体視しているのか、やはり区別して捉えているのか微妙ですが、私は一人一人が仏としての自覚を持って行動することの重要性を教えたものと捉えたいと思います。

この誰もが成仏できるという『法華經』の思想は、提婆達多品に説かれる提婆達多の悪人成仏、龍女の女人成仏にもよく示されています。つまり、仏教史において大悪人とされ、生きながら地獄に落ちたとされる提婆達多（デーヴァダッタ）が過去世において釈尊の師であったことが明かされ、その縁によって授記される物語が説かれています。また、サーガラ龍王の八歳になる娘（龍女）が速やかに成仏することが説かれます。実は、釈尊の時代には、男性も女性も仏教の悟りを得ることにおいて平等でありましたが、後に仏教もインド社会の男尊女卑的な文化の影響を受け入れて、女性

は成仏できないと考えるようになりました。『法華經』は、そのような考えを打破するために、龍女の成仏を説いたのです。

2 久遠の釈尊の思想

歴史上の釈尊が八十歳で涅槃に入ったことは誰もが知る事実です。これに対して『法華經』は如来寿命品において新しい解釈を与えました。すなわち、釈尊は「方便によって涅槃を現する」（方便現涅槃）というものです。釈尊の仏としての寿命が過去も未来もほとんど永遠と言ってよいほど長遠なものであるとしたら、釈尊が涅槃に入ることは大きな矛盾に見えます。このような疑問が起こってくるのは自然です。菩提樹下における成道後四十余年を経て説かれたとする『法華經』のストーリーからいっても、釈尊は『法華經』を説いた後に涅槃に入ることが予定されているのですし、そもそも『法華經』の成立を歴史的に見る立場からは、歴史的釈尊が数百年前に八十歳で涅槃に入ってしまったという紛れもない事実があるからです。そこで、『法

『華經』においては、眞実には釈尊は長遠な寿命を持っているが、巧みな手段によって、涅槃に入る姿を衆生に示すと解釈し、上に述べた矛盾的な問題を解決しようとしたのです。

このように寿量品には、第一に釈尊の寿命は長遠であること、第二に長遠な寿命を持つ釈尊が、衆生を救済する巧みな手段（方便）として、かりに涅槃に入る姿を示すこととともに、方便であろうが涅槃に入ってしまう釈尊の寿命が長遠であることを人々に保証するために、第三に信仰のある者は釈尊を実際に見ることができることを示しています。

3 地涌の菩薩の思想—誓願の宗教

地涌の菩薩は從地涌出品第十五において大地を割って出現し、釈尊の死後、『法華經』の担い手となる菩薩です。この地涌の菩薩の根本的な性格は「願生の菩薩」という規定にあり、このことは法師品第十に説かれています。ここでは、『法華經』を受持・読・誦・解説・書写するなど、眞剣に修行する者は、過去世において

多くの仏たちを供養し、成仏の大願を実現した者であり、本当はそのすばらしい果報を満喫享受していればよいのですが、衆生を憐れむ大慈悲心によってこの惡世に生まれてきたとされます。また、過去において最高の正しい悟りを完成した大菩薩とされ、如来に対する供養と同じように供養される尊い存在であることが強調されています。さらに、清浄な業の果報を捨てたともいわれます。經文には「此の間に生ずることを願う」と説かれ、「自ら清浄業の報を捨て」と説かれるように、業生ではなく、願生の菩薩であることが説かれています。願生の菩薩という考えは、すでに部派仏教時代の大衆部の思想のなかに見られますが、これを拡大発展させたものが大乘仏教の菩薩思想の一つの淵源だと思えます。つまり、仏教の初期の業の思想によれば、この輪廻の世界に転生することは端的に迷いの生存の繰り返しであり、その輪廻をもたらず原因は、煩惱に汚された惡業そのものですが、衆生を救済することを本分とする菩薩がたんに過去の惡業によってこの世に輪廻転生してくることに、一部の仏教徒

の心情にそぐわない点があったと想像されます。そこで、菩薩がこの世に生まれる原因として、衆生を救済しようとする誓願（praṇidāna）の力が注目されたのでした。

『法華經』の信仰者の特色として、しばしばその実践的、行動的な面が指摘されますが、その背景の一つに、『法華經』を信仰する者は、過去世においてすでに最高の正しい悟りを完成した者であるが、衆生への大慈悲心から、あえてその清浄な業の果報を捨ててこの惡世に生まれて、『法華經』を説き広めるとされるという上に述べた思想があると思われます。『法華經』を信仰する自己がたとい現在どんなに恵まれない境遇に置かれていたとしても、それは自己が大慈悲心の故に、あえて恵まれた果報を捨てたからに他ならないと解釈することも可能になります。しかし、このような考えは、第三者には、自己陶醉的なものとしか見なされないでしょう。一方、実際に苦悩に呻吟する者にとつては、世界觀の轉換をもたらす曙光となりえます。ただし、自分が選んで生まれてきたといっても、恵まれない現

在の境遇に安住するだけであるならば、運命に支配された諦念の人生觀にすぎません。たしかに業生と願生の二つは二重基準（double standard）というべきもので、混乱をもたらす面もありますが、自己の業の自覺から、さらに自覺を深めて、自己の本願（過去世の誓願、pūrvā-
praṇidāna）を想起・発見し、自己の境遇の变革、他者の救済に積極的にかかわっていくことは、人生觀の根本的な轉換をもたらすものです。宿業に翻弄される凡夫の境涯からの解脱・超越を願うとき、第一に現在の境遇の責任を他者に転嫁するのではなく、自己の責任において引き受けることが、「宿業の自覺」です。しかし、そこにとどまるのではなく、自己の变革を目指して仏道修行を進める過程において、「本願の自覺」を実現するのです。これはとりもなおさず菩薩としての自己認識を意味します。

宿命と使命という言葉が対照的に取りあげられることがあります。宿命とは現在の自分が過去に制約されている面を言い当てたもので、使命とは現在の自分が未来を決定していく面を表現したものです。宿命では

過去が中心となり、後ろ向きであるのに対して、使命では未来が中心となり、前向きです。つまり、存在としては同じ現在の自分ですが、その意味がまったく異なるのです。意味の転換がなされているのです。釈尊は生老病死の四苦を超越・解脱したといっても、悟りを得た釈尊においても、年老いること、病にかかること、死ぬことという現象、事実は変えられません。しかし、それらの現象を苦しみとして捉えることから解放されたという「意味の転換」を実現したのだと思います。

このような「宿業の自覚」から「本願の自覚」に転換することが大乘仏教の重要な特色であり、私はこれを「誓願の宗教」と呼びたいと思います。この誓願の宗教では、自力によって自己の悟りを追求するのではなく、他力によって絶対的救済者から救われることを求めるのではなく、自己の本地、すなわち、自己は過去世においてすでに悟りを開いた大菩薩であり、自ら選んでこの悪世に生まれ、衆生のために『法華経』を説くべき存在であることを深く自覚して、この世にお

ける使命を実践することが目指されます。

4 『法華経』思想の中国・日本における 展開―智顗と日蓮

『法華経』を所依の經典として天台宗を開創した智顗（五三八―五九七）は、『摩訶止観』のなかで、『法華経』に基づいて一念三千説を示しました。地獄界から仏界までのあらゆる世界が自己の一瞬の心、生命に収まることを説き、我々の無限の可能性、とくに成仏の可能性を説いたものです。『法華経』の一仏乗思想、一切皆成思想を根拠づける理論といえると思います。この一念三千の思想は、地獄の衆生は地獄界に住み、仏は仏国土＝浄土に住むというように、主体者の精神的・生命的境界と、その環境世界とが価値的に一体不二の関係であることを指摘します。このような関係は通常は静止的なものと捉えられがちですが、新しい発展的な解釈として、主体と環境が相互に影響し合い作用し合うという関係を見て取る必要があると思います。

釈尊は、苦の原因として個人に内在する煩惱を取り

出しましたが、その側面の指摘だけでは、ともすると社会や環境に関心を払わない精神主義、主観的唯心論に陥る危険性があり、事実、仏教は長い間そのように見なされてきました。私はここで、社会、文化、環境などの様々な問題を具象化、現実化した煩惱と捉えることを提案したいと思います。それによって、たんに個人の内部の煩惱との戦いだけではなく、社会のさまざまな問題、たとえば戦争、各種の暴力、経済格差、さまざまな分野の差別、人権侵害、環境汚染、生命軽視などの諸問題の解決に努力することが、「外的煩惱」(客体の世界に外在化した煩惱の意)との対決という意味で、仏道修行としての意義を新たに獲得することができると考えます。したがって、仏教者の立場から言えば、上に述べた問題に積極的に取り組むことが、とりもなおさず自己の成仏を目指す修行の課題のなかに組み込まれるはずなのです。

日本の日蓮(一二三二―一二八二)は、仏教史においてはきわめて稀れなことでしたが、社会に対する積極的な関心を示しました。日蓮は、死後の救済よりも、生

きた人間が現世で幸福を享受することを重視し、そのために『立正安国論』を執筆し、政治の実権者に積極的に社会の安定を訴えました。日蓮は、上に提唱した新しい概念である「外的煩惱」がまさに衆生の主体的な生命を制約する力を重視したのだと思います。

現在、『法華経』、日蓮仏法と関連を有する法華系新宗教の勢力は、日本の宗教界において大きな勢力を持つていますが、現世での幸福を願い、その障害となる社会のさまざまな問題に積極的に取り組んでいく態度が大勢の人々の共感を得たのだと思われます。法華系新宗教の現実社会の重視という点は、中国で生まれた人間仏教や、ベトナムで生まれたインゲージドブディズム(Engaged Buddhism)の理念とも共通性を持っています。これらの現代仏教の潮流を見るとき、自己の精神の修養を基礎とするとともに、その面に関心を向けるだけではなく、現代の危機的状况に対応して、広く社会に対して貢献できる道をますます模索すべきであると考えます。

〔付記〕 本稿は、二〇一三年一月二十七日、台北の至善文化会館において開催された法華経展の開幕式で中国語で講演した内容の要約である。講演そのものは、拙稿『法華経』における菩薩道と現実世界の重視」（『東洋学術研究』四六一一、二〇〇七年五月、八六一一〇三頁）と「釈尊の中心思想と『法華経』の特色」（『東洋学術研究』四八一、二〇〇九年五月、六〇一七五頁）に基づくものであるが、ここでは新知見を盛り込んで要約した。